

群書類從

經

五六





僧 4  
775  
219

群書類從卷第百廿一

檢校保巳一集



紀行部五

東家紀行

前河内守親行



鈴江百とせ乃半小池のさて繁の若洲冷しと  
ととちをよとまうとく花ありとくす  
あつはうしといはふはるの舟とをこり  
さうめぬありはぬあまは被白蝶天乃乃公海雲  
似たり首におふたりと書流るあまはたか  
何りそとけりともり金帳七葉のさうん紙  
きう陶器五柳乃すこりとるいあまはたか







けいんのあしりごとを言河部く春有りこら

つり一のらや乃麻のたより区に取らむお取のま

あに修院註子石の清くを沛ありきりよ実の清あり

田歌院御  
一條母后  
法皇院殿  
二女

こさせありきりよ油を流ひる沛河ありこらひぬ

あふ取乃言取よきあさうりお歌うあしきこら

ゆりもつりありなる沛心つらふこらこら

けき関山とらぬきこ打止の浪お津乃京ありこ

きせとつりこらつらありあきこらこらふこら

昔天智三十七代とら乃世代大和お取らのまじりあり道江

の巻賀の那知はりありそ大津の天と月くれ

まうこらふこらいりこらつらおらおら

おやろくあし流なり

ゆ流や大津乃あきしりお歌お取ら

曙乃京ありこらこらこの古橋うら流をわら

しりりりまそつ流油禁沙海江敷山とくは海を

らとつらゆりりんお取のいせらまこら漕舟のあ

とらあし波流とらおらこら

七年と漕舟ありこらつらあし流と又そら

お乃ゆりこらつらと野海とまおらつらお取のあ

あおらこら流木つらつら流のありこら

あおの流り流流おあきお流とらつらあお流

あ乃取とらあしとら西東入をらつら流あり

拾遺  
世事とら  
たてんき  
あしとら  
のあしと  
のあしと







































しつ流し居る能く茶ありとくすむと能くあつてもうふ  
すつあつていふをそく少くしゆひとて松林庵とせしむ  
南に野山とく秋の紅葉ありけり谷より麓より山  
らりおきふか入る能くして麻乃音ありとてまなび  
まのうらみあり終るり

踏らふ草の積とてきりしきよありとて秋の中山  
たふぬとありけり松林のやと菊川にありとくあり去  
り一承久明徳二年の秋の法中中門中納言守りとあり  
人の罪ありとくあつて終るりふは若ふありとて  
若ハ南陽縣乃菊水に流と流と終ると今ハ東海  
道の菊川西岸ノ宿とて會合ありとありとありとあり

まこれとありとありとてつと終るりふは若ふありとて  
あつとありふたありふたありとてのまのしと終るり  
とつとあり今ハ流と流と終るりまなびとありとあり  
とありとありふたありとてつと終るりせのまのしと終るり  
ありとありとありとあり

つと終るり今ありけりつと終るりせのまのしと終るり  
菊川とありとありとありとありとありとありとあり  
とありとありとありとありとありとありとありとあり  
やうなり奥より大井川とありとありとありとありとあり  
河原乃中ふ一すりありとありとありとありとありとあり  
く入るりふたありとありとありとありとありとありとあり







年月日とらうとあふひり一叔村の首陽乃雲  
に今く程とるの歳とらう許也り頼れは月也を  
か一をうつ一瓢の器とらをありとしりり此居  
のありありと殊文控とらをうよう所とらえと柴木  
わくわくありありと思ひありありと内あり所と  
孤心乃風の産り一仰とらと津城のまはれとす  
ゆせりといねとらうとみえと中とらとふふとら  
世とらふふとらとらとらとらとらとらとらとら  
け居のありありと敬をうと次味とらとらとらとら  
まがふ卒於海の身はとらとらとらとらとらとらとら  
書付あり中とらとらとらとらとらとらとらとらとら  
うとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
のとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

秋とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
程とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
うとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
あふたはとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
言中細とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
ありとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
ら神とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
乃能とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら































師命を仰ぐ事ありとむりくさりて訪り  
わあとなりぬ藤氏と漢と別一十九年の藤氏結  
書後うねふりり一子里はららるる成力あり  
らるるは國のま一まのきもやうりりり  
相田くき法あり一のせせしりりりりりり  
まきける懐ちたあくろよほき結くつりくせ結り  
らるるらりりりりり一ま一けりりりりりり  
清けくともある様

入る海に舟をたひのらるるはあまそや藤のまあり  
かろわらるる神女月の女日あまりたはらるる藤氏結  
みは事ありあそけりりりりりりりりりりりりりり  
らり水くまはわらるるらりりりりりりりりりりり  
まらひりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
みかへる上格うまに朱買はらるるわらるるらりりり  
ねはへる山をたあらるるらりりりりりりりりりりり  
十月下と自然晴すくふ鎌倉とそらりりりりりりり  
ひく小舟の障子の書付

あまきりりりり

右東園新行上未行于世々本林轉共明所着全損夫未抄取成役奉  
定お深親行伴汝授已う











































































きりふくしきあまのうらみ  
しんじつにふくしきあまのうらみ  
あまのうらみ

あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ

あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ

あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ

あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ

あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ  
あまのうらみ



とまうとておろしやついでとてうへに落つとてふ小折と  
つゆとておろしとておろしとておろしとておろしとておろしとて  
おろしとておろしとておろしとておろしとておろしとておろしとて  
おろしとておろしとておろしとておろしとておろしとておろしとて  
おろしとておろしとておろしとておろしとておろしとておろしとて

七轉寂記以汝業拾葉集校合

大徳日全の年お月末のころに、お梅の御座りて、お梅とてお梅とて  
お梅とてお梅とてお梅とてお梅とてお梅とてお梅とてお梅とて  
お梅とてお梅とてお梅とてお梅とてお梅とてお梅とてお梅とて

中村直道

群書類後巻第百廿一

群書類従巻第百三十二

校核保己一集

紀行部六

いさよりひの日記

阿佛

弘安園経 序 席 便人懐水 講堂於 石 孝経王章 万葉上 水菜之箇 乃田高葉 緒吹等之 知兒等之 不見原鴨  
ひの日記のありよりありといふありとてありとてありとてありとて  
ありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとて  
ありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとて  
ありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとて  
ありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとて  
ありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとてありとて







古今雜下

文彦のや  
ひそに  
あつこ  
えん  
りひ  
りひ

建治三

後撰

東鑑引

人

侍

建治元

後任

建治元

侍

建治元

後任

建治元

侍

建治元

後任

建治元

侍

建治元

後任

建治元

物... 建治三

そ... 建治三

り... 建治三

江... 建治三

ら... 建治三

あ... 建治三

り... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

あ... 建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三

建治三



あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

一代聖記云  
新陽明門院  
信子生治元



























すけらふに花の初をけりてあきなりけりしるもあはれ  
けりしあひかりあきも人よあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし

新古今和歌集  
卷之八  
下  
松尾の御  
ちか  
あとの月

し川あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし  
あはれしとてあはれしとてあはれしとてあはれし

白氏文集  
縛戒人云  
朝食飽湯















五十一

あはれと恋の時もさしはかたしと  
あはれと恋の時もさしはかたしと  
あはれと恋の時もさしはかたしと  
あはれと恋の時もさしはかたしと  
あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

二

あはれと恋の時もさしはかたしと

後高倉院  
式乾門院  
姫宮四條  
院准母

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

後高倉院  
姫宮後堀  
河院准母

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと

あはれと恋の時もさしはかたしと



たしつゝもあつた目ももく様子の心からいふに  
らうりくかゝる海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

一とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

とていふもあつた

とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた

とていふもあつた海もさうな半もあつた  
とていふもあつた















































初冬 霜降  
年 卯 戌 又  
ある 丁 巳  
卯 辰 巳 未  
午 未 申 酉  
酉 戌 亥 子  
子の 子 丑  
中の

若かりしころは 物に法則ありて 海をうへに  
らひおこさく ちやう中ふあこりぬらつ西行の ちよ  
か ーとあひひきき ーちよちよあこりぬらつ西行の  
らきぬちやう中ふあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ  
中納言師仲高直乃任とて ーちよちよあこりぬらつ西行の  
中ふあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
まてゆかぬ 撰集乃中ふあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ  
頼政の ちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
ゆ ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
あ ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
あ ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の

乃 ちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
ちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
法 ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
つ ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の

亥 子 丑  
す ちよちよあこりぬらつ西行の  
う ちよちよあこりぬらつ西行の  
日 ちよちよあこりぬらつ西行の  
日 ちよちよあこりぬらつ西行の

法 ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
ちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
ちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
時 ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
期 ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
ちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の  
時 ーちよちよあこりぬらつ西行の ちよちよあこりぬらつ西行の



申の孫の終のまじ終りともありたるまじ終りたる  
そまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
力ありたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
る水ありたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
のせありたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
海もありたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
かく終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる

箱根池や海ありたるまじ終りたるまじ終りたる  
まじ終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
まじ終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
まじ終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
まじ終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる

とせのつらさあはれぬ終りたる

み一人の若のむめ終りにその月を程をむめあり  
そはありたりたりたりたりとありたりたりたりたり  
せんやの借やありたりたり中ふひありたりたり  
とありたりたりたりたりたりたりたりたりたりたり  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
宗已終りたるまじ終りたるまじ終りたるまじ終りたる  
唐へつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
えはつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら































うらやまをいふにみちあり又張のさしはめくらし  
ふり張とて道とありあむ乃家とておぼくはうかへ  
たるよきありのきりのわらもあまや塩やうあうんと  
みゆ海とて船のつめともあうやんひくすち也文の  
月よわうりる者もあうとていふすうわつ御門  
と十金國の中うとてあむとていふうりよはあかき  
いあへん人かひんともいりありとてあやう

と明の月とてあや塩の乃海とてあまをいふらうし  
それより浦つとていふ松橋とてあつ孫のきとあうあまの  
とみうとていふあり又此のうとてあつ孫のきとあうあまの  
開ふり也傳る百人寺にすとてあや寺のまへみあうとてあ

あむの浦つとていふとてあつ孫のきとあうあまの  
次あるいあうりてを橋とてあつ孫のきとあうあまの  
あひひとていふありとてあつ孫のきとあうあまの  
あうりてとてあつ孫のきとあうあまの  
堂ありとてあつ孫のきとあうあまの  
しんふ山陰の坂とていふありとてあつ孫のきとあうあまの  
海りてとてあつ孫のきとあうあまの  
あまをいふとてあつ孫のきとあうあまの  
みとてあつ孫のきとあうあまの  
あまをいふとてあつ孫のきとあうあまの  
はうとてあつ孫のきとあうあまの







あつたをゆきかきかた

末乃松山よりこころなほしむらさきみやあめ

と

浪あそぬ神人あまの末乃松山よりこころなほしむらさきみやあめ  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた

こころなほしむらさきみやあめ

と

浪あそぬ神人あまの末乃松山よりこころなほしむらさきみやあめ  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた

あつたをゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
一秋りきひりゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた

ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた  
ゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかたゆきかきかた











